

報告② (特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化(1)

## 第20代校長熊谷修山先生(2016年度～2017年度)の語り

——キャリア教育では「何を」と「どこで」が  
リアリティとして重要になる——

青山学院大学 樋田大二郎

◇ 熊谷校長は、インタビュ時点では島根県立津和野高校校長であり、津和野高校で次々と高校魅力化改革に取り組んでいるところであった。インタビュは二〇二〇年二月一六日に地域人材育成研究会のメンバーが空港に向かう途中の益田市内の喫茶店で行われた。熊谷校長は吉賀町との縁が深く、妹さんは吉賀町内に住んでいる。教頭時代(二〇一二年度～二〇一三年度)と校長時代(二〇一六年度～二〇一七年度)の二回、管理職として吉賀高校に勤務した。

校長時代には、地元住民のほうから、こういう生産物(文化)があるけれど授業に役立つだろうかと提案がなされるような存在であった。なお、熊谷校長によると、地域の特色を活かした教育や地域課題解決型学習は吉賀高校は農業が盛んな吉賀町の状況を反映し、津和野高校は観光の町である津和野町の状況を反映しているというが、そのこと

は別の機会に詳しくお聞きしたい。

◇ 熊谷校長が吉賀高校教頭(二〇一二年度～二〇一三年度)から他校に異動して、校長として戻ってきたのは二〇一五年度であった。インタビュの冒頭で二〇一二年度の頃の吉賀高校のことを話していた。その話の中で、その後の吉賀高校の魅力化を方向付けることとなった「聞き書き」について、以下のように語っている。

(コーディネーターの)Aくんがどうしても「聞き書き」やりたいて。これは面白いなと思って、魅力化の取り組みとして「聞き書き」をやりました。その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作って中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル



を作ったりとか、ペン作っていたのかな？ 何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれで作ろうというような流れだったので、「面白いな」と感じるところがあつて「聞き書き」は始まつた。 インタビューより引用。以降、同じ。

このように「とりあえず『魅力化』として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれで作るものを作ろうというような流れ」の中で、「面白いな」と感じるところがあつて「聞き書き」は始まつた。

◇ 熊谷教頭（当時）が面白いと感じた背景には、おそらく吉賀高校以前の高校でのキャリア教育や進路指導の経験があつたと思われる。

推薦入試になつた時、一番必要なのは志望理由書なんです。志望理由書を生徒に書かせた時に、そのリアリティに何が入ってくるかというと、もちろん第一は将来の夢ですが、それと将来の夢を「どこで」やるかというのが非常に重要になってくるわけです。そうすると浜田高校の生徒たちが、「将来は」って言った時に「浜田で」っていうのがプラスされるわけです。われわれ教員が生徒に対して「これいいけどさ、これどこでやるの？」って訪ねた時に、生徒が自分で「将来はここ浜田でやりたいですね。」と素直に答えられるんです。

吉賀高校振興会総会で（聞き手注…後援会に当たる所）、私が「やっぱり子どもが将来Uターンするためのことを考えていか

ないといけないですよね。」っていう話をそこで最初にしたんです。そうするとサクラマスっていう言葉の持つイメージと、われわれが吉賀高校としてもUターンをきちっと増やしていかないと、どんなにUターンの人が増えても、町が変わりましたではないけないという話をしました。そういう部分に対しては非常に共感を持っていただいたかなと思っています。だから、吉賀で私苦労した感じが全然ないんです。

◇ 熊谷校長は、生徒が将来の夢を持つこと、そしてそれをどこでやるのかを考えることが推薦入試の実績の向上に役立つたという。しかし、熊谷校長は志望理由書を書く指導は出口指導にとどまらせてはいけないと考え、キャリア教育の枠組みの中で推薦入試の指導を考えている。

キャリア教育です。将来像を、自分のキャリアの全体像を考えさせる。で、その将来という所に、「何を」というのと「どこで」というのが非常にリアリティとして重要になる。だからそこを考えさせる。そうすると意外に（地元）帰ってくるのではないかな？みたいな。結構浜田高校の時には「市長になりたいです。」という子もいたりするんで面白いなと思って、だからそこは案内楽しんで取り組んでいたところがあります。

やっぱり推薦とか使うとだんだん合格していきます。……でもその推薦というのは合格させるための推薦だった。……出口指導です。ところがやっぱりそうじゃなくて志望理由書というのも、

もっと将来像とかいろいろ考えていこうという感じは、そっちの方向にどんどん転換していったというか、こうしましょうというよりも、魅力化としてそうするしかない流れがありました。特に「転換するぞ。」というふうに転換した記憶はないけど、だんだん検討会とかやれば「こういうふうにやらせよう」とか。

◇ 熊谷校長は、キャリア教育としてアントレプレナーシップ教育を構想した。すなわち、高校魅力化に取り組み中（教頭時代は主として「聞き書き」）で、地元で生活する人にふれあうことで生徒のキャリア発達を促そうとした。ただし、熊谷校長は決して吉賀町内でのキャリアの夢を持たせることにこだわっていない。しかし、「どこで」という問に対して町内だと考える生徒は少なくない。また、関係人口となることだと答える生徒も少なくない。

生徒が授業で地域に出て行った（顔を見せた）影響や町や地域住民が高校を支援する場面が増えた影響は、新しい側面での地域の活性化をもたらした。

「聞き書き」というのが……これで子どもたちが地域に出て行くっていう形がスタートしたかな。これは部活とかではなくて、子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるというような構図が少しずつ形となって出来上がっていきこうとしていて、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。

◇ やがて、吉賀高校を応援する風土が形成されていく、この風土の中で組織されたのが吉賀高校応援隊である。この吉賀高校応援隊の事例は、地域学校協働の中では協力も対立もあること、対立の中で提起されたアイデアが実現されることがあることを示す事例である。「おらが高校」の存続・発展は、それだけ重要な関心事なのである。

吉賀高校応援隊については本誌掲載の第一九代齋藤校長インタビューの中でも「(応援隊)は、町との関係が難しくなりましたので、なかなかやりにくい面はありましたけども。ただ、住民の直の声、必ずしも町役場には行かない住民のいろんな気持ちとか、情報とかを吸い上げておられる人たちだったと思います。……町長選もあり、他にもいろいろな対立があったりしたので、感情的には難しかったですね。しかし、今思うと、あれだけけんかした相手の応援隊の人が言ったことを町が実現していますよね。これがすごいなと思いますね。」と語られている。

この吉賀高校応援隊に対して、熊谷教頭(当時)は高校を応援することと町を応援することがリンクしていることを訴えかけている。

高校を応援することがひいては町のためにちゃんとなるんだ、町の活性化に絶対につながっていくんだと、こういう文言を入れてほしいと伝え、それを入れてもらいました。だからそれはさっきのサクラマスもそうだし、振興会の時にUターンをとということも、高校の魅力化が町のためになるという点で全部共通していると思うので、そういう感覚で、皆さんに集まってもらったっていう、ここ結構重要だったと思います。

だけどその元をたどっていったら、結局「寮」や「塾」というのは応援隊の人たちが……町長さんにガーツ言って戦ってくれたからできたような面もあるので、だからそういう意味では私がない二年間って多分一番苦労されたと思うんです。私が行ったらもうできることになっていたので、「ありがとうございます。」という世界だし、最後町長さんも……「県が吉賀高校潰す言うたらなあ、わしは町営にしても、町立にしてもやっていこうちゃうくらい気持ちをもっととるんじや。」と言って、怒られとるか、励まされとるかすごくわからない感じだったけど、……結果的には寮もできて塾もできてという点ではこっちの望んでいることが完成されている。

◇ 吉賀高校は中高一貫教育(連携型)を募集対策の柱にした時期があった。四〇名の定員を町内四中学校からの特別選抜に割り振っていた(定員割れしていたので実質勉強がでなくても合格していた)。しかし、二〇一七年度入試からは四〇名定員の五〇%ほどを特別選抜枠とし、残りを一般選抜にした。

やっぱり「吉高来てよ。」っていうところは、荒れるから入学者は少なくなる。だから「来てよ。」って言うってちよつと増えるけど、その分余計荒れるみたいなの。そういうレベルでの波を繰り返していったということでしょう。……「中高一貫教育で誰でも入れるや。」っていう感覚が非常に強くて、それをずっと感じていました。何とかしなくちゃいけないみたいな感じはあったんです。あれが大きな転機です。やっぱり齋藤先生が思い切って中高一

貫教育を五〇%の枠にされたというのがすごく大きかったと思います。

◇ つづいて、「聞き書き」の発展過程をお話しいただいた。最初は、「みんなどうやるかわからん、とにかくコーディネーターが言うように子どもら連れて行つてとにかく聞いて帰ってくるみたいな形をやったんです。」という状況であったが、そのあと今日のアントレプレナーシップへの発展につながる二つのポイントがあったという。

一つの分岐点は、「聞き書き」をやるのはいいけど、聞いて書くだけだったら知識が付くだけです。「へえー。」で終わってしまふ。だからある先生が「子どもらはそれでどんな力が付くんや？」っていう話をしました。「聞き書き」が二年目になる時に、彼が一年生の担任になるので、「聞き書きを返させてくれ。」というのを言ってきたんです。結局要は抽象化する作業とか、まとめるといような作業がないと子どもの力が付かないじゃないですか。それでその時に作ったのが吉賀町マップです。

もう一つ大きいのがそこからアントレプレナーシップです。「結局聞き書きしてどうするんですか？」っていう……話になった時に、吉賀町にこないものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。……要はウターンしてくるのに、結局「先生仕事がないけん、帰られんわ。」っていうのが多いのに対して、「じゃあ、仕事自分で作ればええじゃん。」って言うためには、やっぱりアントレプレナーっていう言

葉自体も知った方がいいじゃないですか。それが啓発になり得るなと思ったので、だからアントレプレナーっていう言葉を敢えて残して、かといつて起業だけではちよつと聞き書きの要素がなくなるので、アントレプレナーシップと、だからその時私は起業家精神を学ぶんじゃなくて、「起業家精神に学ぶ」としたのはそなんです。

◇ 熊谷校長は、学歴至上主義的教育観や産業主義的教育観を超えて、地域主義的な教育観を語った。かつての島根県の高校教育の「黄金期」には、生徒が東京に出て大企業や中央官庁で働くことを是とし、そうしないことが予想される生徒に対しても入試の学力や価値観を形成することを高校の役割と考える傾向があった。これに対して、「一つの責任」として、将来吉賀町に戻るための教育を考えることの重要性を語っている。

やっぱり将来吉賀町に戻って何かしたいっていう意思を育てるっていうのは一つの責任だなっていうふうには思っています。それは今でも津和野でも全然変わらないので、ただそのためには自分の出身地吉賀町に対して良さを知る、そして誇りを持つって重要だと考えていました。

そうすると良さを知るって、……重要なのは吉賀町の人と出会うっていうことだと思っていました。そうすると誇りを持つってどうなのかって言った時に、誇りを持つための仕掛けとして、吉賀町について自分の言葉で子どもが語る、子ども自身が語るって



重要です。だからアントレにしても聞き書きにしてもそうだけど、発表というのはずごく重要で、そしてそれをキャリア教育テーマみたいな形で町の人の前でも語る。

◇ 学歴主義や産業主義の観点からは一般に成績のよい生徒ほど都会で暮らすことを志向すると思われるし、実際に成績の良い生徒は大会の大学に進学し、大都会で生活してきた歴史がある。あるいは、大都会の大学に進学し、地方のエリートとして地方中核都市で生活したり、県の職員として県内各地を移動して生活したりしてきた歴史がある。ともすると、地元に残ることや大都市からUターンすることは自信のなさや挫折のイメージと結びついた。

しかし、高校魅力化に取り組む生徒はUターンを前提にしたり、関係人口となることを前提に町外への進路形成を行うケースが現れてくるようになった。

でもそれって誇りを持っていないと語れないかもしれないけど、語ることによって誇りを持つことはあり得るだろうっていう所はありますよね。……やっぱりいい学校でないとダメだし、だけれどいい学校だから誇りを持てるんじゃないかって、自分たちが積極的に関わっていくっていうか、いい学校にしておくことでいい学校になるっていうのがあるじゃないですか。

……自分がやりたいこととか、やったことをちゃんと自身持って発表できるようにしていったら、結局いい学校になるじゃないですか。それが誇りにつながっていくだろうっていう所は思っ

いました。特にやっぱり西部の中山間地の子どもらっていうのは、そもそもいい子は外に出て行くって感覚でいるから、そう考えたら古賀に残るってことはそれだけで自信をなくすような要因だとすると、もつと子どもらが自信を持ってくれるような、……自信を自然に持つような仕掛けを作っていく重要さをずっと考えていました。

なんとなく「もういいや、これでいいです。」みたいな感じで卒業していくような感じにならないようにするために、結局そういうアントレだとかをやるっていうことです。それは子どもらの能力の開発・開拓というか、何か育てるといえるのはこの子のこんな能力があるみたいなのがわかってすることじゃない、そうじゃなくてこの子らどういう能力があるのか全然わからない状態というスタートで、そういうことをしていかないといけないんじゃないかというふうに思います。

◇ ◇

### 1 吉賀高校の魅力化初期のこと

——本日はよろしくお願ひします。

熊谷…浜田高校に九年いたので教諭としては異動はそんなに多くないほうだと思っんです。ただ管理職になってやっぱり二年ごとにポンポン動いていますので増えました。それで矢上高校の最後の年、五年目

が平成二三年なんです。そこで魅力化が開始されているんです。ただし矢上はその時のⅡ期校なので、二三年にはまだ取り組んでいなくて、計画を立てなさいという段階だったんです。矢上高校では進路部長だったので、計画に携わったのがその年のいよいよ終わりです。二四年から吉賀ですので、魅力化のスタートの所から結構やらせていただきました。

—そのころのことを、もしわかれれば教えていただきましたんですけど、吉賀はこの魅力化の話を受けたわけですけど、これは受けたいとか受けたくないじゃなくて指定されたようなそんな感じになるんですか？

熊谷…そこは、最初の吉賀が二三年にどうやって受けたかっていうのはわからないです。

矢上は躊躇したんだと思うんです。だから一年待つて取り組もうという形にしたので、その一年間で考えなくちゃいけないという所だったですね。吉賀は私の前任の教頭が飯塚先生で、太田校長先生ですから、何かやらなくちゃいけないという感じだったんじゃないですかね？

太田校長先生は吉賀の校長で最後三年やって終わられて、その三年目の所で私が赴任しました。

—先生が吉賀に行かれたのは、そつすると平成の？

熊谷…二四年です。



——二四年ですね？ 平成二四年ということは二〇二二年、高校魅力化がスタートした翌年に来られた。

熊谷…そうですね。二〇二一年から吉賀はスタートですので、私が行った時にはもうスタートしていました。

——そのころのことをお伺いしたいんですけど……。

熊谷…そうそう、吉賀は一人コーディネーターで先にいた人が、私が赴任した時にはもう異動していたんだけど、彼が吉賀を音楽の町にしたいという壮大な構想があつて、魅力化も音楽部を作ろうというので、ドラムだとかギターだとか、ごそつとそのお金で買っていると思うんです。だから私が教頭で行つて整理したのは、その音楽部の位置付けでした。多分校内の十分な合意もなくやっていると思うんです。「とりあえず、そうしよう。」ということのみんな買って、買ったはいいけど、「音楽部つて何するの？」つていうような、行った時にはそういうレベルだったです。だから一応魅力化の中で音楽部の位置付けというのはちよつと整理しました。それからコーディネーターの方が代わつていて、男性Aくんつていう彼が。

——Aさんにはお会いしたことあります。

熊谷…彼がコーディネーターになつていて、

——僕、Aさんが初代だと思つていました。

熊谷…前に人はいました。私が行つた時にはAくんだったので、Aくんがどうしても「聞き書き」やりたいつて。これは面白いなと思つて、魅力化の取り組みとして「聞き書き」をやりました。それから、その時の吉賀高校の魅力化の取り組みは、部活でTシャツ作つて中学生に配るとか、校名の入ったクリアファイル作つたりとか、ペン作つていたのかな？何かそういうネーム入りの、ノベルティグッズを作るような、とりあえず「魅力化」として何かやらなくちゃいけない、だから、お金があるからそれでできるものを作ろうというような流れだったかな？ ただしサクラマスプロジェクトのサクラマスは、何さんだったかな？

——魚の人です、吉中さん。

熊谷…そうそう、吉中さんの発案で、サクラマスプロジェクトという名前は決めていたと思います。(聞き手注…吉中力さん。著書に『高津川不思議探検隊』、『魚酔の詩』があり、サクラマスについても書かれている。)

——二〇年前から実は言っていたつて本人もおつしやっていました。

熊谷…そうそう。戻ってくるという意味では、すごくフィットするなと思つたので、私はそのサクラマスプロジェクトという言葉は積極的に使っていました。(聞き手注…海降型のヤマメの呼び名で大きく育ち遡上する。)



## 2 吉賀高校以前のキャリア教育・進路指導の経験

——各校の話を聞いてると、高校魅力化は当初、お金はあるけど何に使えばいいのかよくわからないから、何かとにかく用具を買えばいいのかなみたいな、よくわからないことになってしまっケースも多々あったというふうな話も聞くんですけど。

熊谷…そうですね、まさにそうだと思います。それで、私、浜田高校、矢上高校の五年のもっと前、浜田高校で、最後に進路部長やっただんです。そうしたらその所で、ちょっとその辺は長くなってもいいですか？

——はい。

熊谷…いろいろあつて進路部長になってすぐの時から、推薦入試に取り組むことになったんです。そうすると推薦入試になった時、一番必要なのは志望理由書なんです。志望理由書を生徒に書かせた時に、そのリアリティに何が入ってくるかって言うと、もちろん第一は将来の夢ですが、その将来の夢を「どこで」やるかというのが非常に重要になってくるわけです。そうすると浜田の子たちが志望理由書を書いた時に、「将来は」に「浜田で」っていうのがプラスされるわけです。われわれ教員が生徒に対して「これいいけどさ、これどこでやるの？」って尋ねた時に、生徒が自分で「将来はここ浜田でやりたいですね。」と素直に答えてくれるんです。そういう経験があったものだから、矢上に行っても二年目の時に三年の学年主任だったんだけど、結構生徒が推薦出

願しているんです。その時にも結局生徒の書いた志望理由書には、「将来は地元邑南町で……」という言葉がたくさん出てくるんです。そうすると、これは何年も経ってんですけど、実は今矢上、邑南町の役場には当時のそういう子たちがすごく帰ってきているわけです。やはり生徒が自分で将来のことを語るこの意味があると。子どもたちが自分で将来こうしたい。「ここ邑南町でなんとかしたいです。」とか「役場で……」っていう言葉が嘘ではないという感覚があつて、私は生徒が志望理由書を一度書くことがすごく重要だと思っようになっていました。そのあと、進路部長の時にも推薦でやっばり生徒が志望理由書を書いて、だからその年代の子も結構地元に戻ってきているんです。

そして矢上でも魅力化にちよつと携わっていたので、そういうイメージを持ちながら吉賀に教頭で行ったんです。そういうイメージがあるから、最初の年の太田校長先生の時の、六月にやっった吉賀高校振興会総会で（後援会に当たる所で）、私が「やっばり子どもらが将来Ｕターンするためのことを考えていかないといけないですよ。」っていう話を最初にしました。サクラマスっていう言葉の持つイメージと、われわれが吉賀高校としてもＵターンをきちよつと増やしていかないと、どんなにＩターンの人が増えても、町が変わりましたではいけないという話をそこでした。そういう部分に対しては非常に共感を持っていただいたなと思つています。だから、吉賀で私苦労した感じが全然ないんです。

——ちよつとよろしいですか？

熊谷…どうぞ。

——二つ話があるんですけど、推薦やろうってことになったのは、おそらくこれ二〇〇〇年の前後ですね？

熊谷…そうです。

——そうするとまだ島根県では、島根方式で、進学指導がかなり盛り上がっていた時期ですよ？

熊谷…そうです。だから結構国立大の数字とかつてすごくこだわっていた時期です。二〇〇二年とかそのころかな？だからそのころに中山間地以外で、要するに都市部の大規模校と言われる所で、当時私が行った時九クラス、途中で八クラス、八クラスになって、六クラスになる前に私は出たのかな？ そんな感じだったんですけどその中で、そういう規模の進学校で、推薦入試に、学校全体として取り組むなんて島根県ではなかったんです。ある意味すごく特殊なことをやっているっていう感じでした。

——やるしかなかった？

熊谷…ただやるしかなかったです。

熊谷…結果的にそれはキャリア教育です。将来像を、自分のキャリアの全体像を考えさせる。で、その将来という所に、「何を」というの「どこで」というのが非常にリアリティとして重要になる。だからそこ



を考えさせる。そうすると意外に(地元)帰ってくるのではないかな? みたいな。結構浜田高校の時には中には「市長になりたいです。」という生徒もいたりするんで面白いなと思って。だからそこは案外すごく楽しんで取り組んでいたところがあります。

——はい。では、そのイメージで吉賀に戻ってきて、吉賀は部活のほうを活発にさせようとか、何かグッズでお金を使うとか、しているような状況だった。

熊谷…そうです、状況だったです。

——魅力化を行うことで、サクラムスのことを行うことで、進学実績とそれからUターンを増やすお話をその場所でなさったら、比較的に受け入れられたと?

熊谷…そうです。私はその点で苦労した感は全然ほとんどないです。

### 3 吉賀高校応援隊

熊谷…(応援隊のBさんは)すごく協力的で、何かそういう吉賀でこうしなくちゃいけないということに賛同してもらったっていうところもあって、職員の会議に出てもらって「先生方ありがとうございます。」なんてBさんがいきなり言われたというようなこともありました。その中で支援者は何かやっていかにかいけんという感じで、すごく高校に対して協力的でした。だから私の中では苦労したというような感じが無いんで

す。

——なるほど。

熊谷:また、私がソフトテニスの指導をしていたものだから、吉賀でジュニアのソフトテニスの指導にちよつと顔出す感じで行ってたら、別の支援者さんの子どももそこに入っていたんです。お子さんが中学生のその支援者さんと、「今吉賀高校はこうなんですよ。」ってその人に話していたら、彼がすごく熱い人で、「応援しよう。」っていう感じになつてくれて、BさんやCさんの声かけで吉高応援隊を作ろうということになりました。私が教頭の最後には高校でシンポジウムをしました。地域のの人に学校に集まってもらって、つながりの中で多くの人で「吉高応援隊作るぞ」と。で、吉高の応援隊ができて、吉賀高校に一回集まってまず状況を聞こうとか、その後にもワークショップやって吉賀を盛り上げるにはどうしたらいいかって話そうという会を持ってくださって、それで私が出たあとには教員と飲み会までやっているんです。

私が在職中に、吉高応援隊が吉高を応援しようっていうピラを作ってくれたんです。そうしたらそれには「吉高を応援しよう。」までだったんです。吉高を応援しようという会を作って、みんなで集まって吉高を応援しようまでだったんです。そこで私が、「吉高を応援することが町のためにちゃんとなるんだ」ってこれ入れてほしいと。「高校を応援することがひいては町のためにちゃんとなるんだ、街の活性化に絶対つながっていくんだ。」と、こういう文言を入れてほしいと伝え、それを入れてもらいました。だからそれはさっきのサクラムスもそうだし、振興会の時にUターンをとということも、高校の魅力化が町のため

になるという点で全部共通していると思うので、そういう感覚で、皆さん集まってもらったということが結構重要だったと思います。

——この段階で、もう吉高を元気にすることが町を元気にするんだというふうには、熊谷先生がおっしゃって、そのことが応援隊にいるような方のレベルでは了解して？

熊谷…そこに共感してもらったというのが大きかったと思います。

#### 4 聞き書き

——はい。応援隊のことを中心に当時の地域の状況をお伺いしましたが、ほかには当時の地域の状況で押さえておくことがありますか？

熊谷…コーディネーターが中心にやっていた「聞き書き」というのが、私が行った一年目なんですけど、これ聞き書き甲子園とか出たりしているんですけど、これで子どもたちが地域に出ていくっていう形がスタートしたかな？

これは部活とかではなくて、子どもたちの活動が地域の人の目にとまる。でもそのことで「聞き書き」ですから地域の方で語る人がいるわけです。その語る人たちも元気になるといような構図が少しずつ形となって出来上がっていくようにして、それでやっぱり広く受け入れてもらえるようになったですかね。だから柿木（地区）の奥のほうにも行ったりとかいろいろな方々のところに、夏なんかでも生徒が行くのを私も見て回ったりしたんですけど、とても面白いなと思ってい

ました。

——コーディネーターが始められたというのは、なんで「聞き書き」だったんですか？

熊谷…彼自身が、都会地出身の人で、田舎暮らしに強い関心があって、聞き書き甲子園が面白いということで関心を持っていたんじゃないかな。

ただ、それは主催がNPO法人だったと思うんだけど、その関係があったのかどうか。それが面白いということで、コーディネーターのAくん自身は地方に来てから、地方の素材をもっとクローズアップしたいという意識はあったので、「聞き書き」は面白いということをやったんだと思います。でもやったのはすごく正解だったと思うのは、そのことで生徒が地域に出て行くことが、吉賀町で一般化されたっていうのが重要だったです。魅力化とすればそうやって地域の人に生徒の様子も見ってもらって、吉賀高校を認知してもらおうというんですか。

それから吉賀高校の中高一貫教育（連携型）の完成がたぶん平成一八年ぐらいかな？ 当時はやっぱりいろいろ話を聞くと、中高一貫だから子供はみんな吉賀高校に行かなくちゃいけないというような強制的な制感があったようです。その強制的な制感に対する抵抗感からか、あまり協力的でないような流れというかあったのかなというふうには思っていました。

そこでとにかく吉賀に行くからは、魅力化について議論もいろいろあったのですが、やっぱり中学生が来たいと思ってくれるような仕掛けを作っていく。その時に認知されるのは大事だから、さっき言っ

た「総合的な学習の時間」を使った「聞き書き」で子どもらが出て行って、「あ、吉高の生徒頑張っているね。」って言うようになるっていうのは非常に重要な要素だったと思うんです。

それから、ただ姿が見えるだけではなくて、やっぱり発表まで持つていくことによって「聞き書き」の対象になった人たちに学校に来てもらって、「こんなふうにとめました、どうでしょう？」って聞くような形の発表をするのがすごく大事で、「やっぱり吉高生徒頑張っているよね。」というのを少しずつ広げていくようなイメージだったです。

## 5 中高一貫教育

——私たちが昔の卒業生にインタビューした時に、その人の高校時代に結構な荒れ方をしてたということでした。中高一貫のころの荒れ方というのは昔から同じようだったでしょうか。

熊谷…ある程度ずっと、でしょう。それは私が若い時に勤めていた時にもいろいろありましたから。

——そうしますと一瞬荒れた学校が回復したということではなくて、ずっと教育が困難だった学校が変わったという、そういう認識でいいんですか？

熊谷…そうですね。(生徒の荒れは)波はありながら、やっぱり「吉高来てよ。」っていうところは、荒れるから入学者は少なくなる。だから「来てよ。」って言うってちょっと増えるけど、その分余計荒れるみたいいな。

そういうレベルでの波を繰り返していたということでしょう。

——今の吉賀高校は全然そんな雰囲気ないんですけど、そういう意味では魅力化が上手くいったのでしょうか。

熊谷…進路変更もないっていう話ですから今すごいですよ。

——魅力化導入した前後と校長先生になって再び赴任された時の両方についてお伺いしたいんですけど、学校の状況とか教員集団の様子とか、それから入学してくる生徒の様子はそれぞれどうだったのでしょうか？

熊谷…私が教頭で行った年が、女性Fが一年の担任だった時、

——女性F先生というのは今もいらっしやる女性F先生？

熊谷…そうそう、その頃はサッカーも結構力入れていたので、サッカーのいい子たちが来てくれるような流れがある程度できて、私が行ったのは彼らが一年生の時。ただ「中高一貫で誰でも入れるや。」っていう感覚も強くて、それをずっと感じていました。

——なんとかしなくちゃいけないという感じはあったんです。とはいえあの年はサッカーの子が元気で人数も入ってきて、体育のサッカーの教員が指導してくれていて、だいぶ熱を入れて中学高校のサッカースクールにも参加したりということまでつながりができて、それで……。



——県大会でいい所までいった時の指導者の方ですか？

熊谷…そう、だからあの時は強豪の私立高校とやって相手はBチームではあったけど、惜しくも負けたみたいない試合はしたんです。

その前の学年は少なかったです。二〇何人、いよいよ(統廃合の)ギリギリの所だったかな？ その段階ではまだ全員が中高一貫教育で入ってくる流れだったですかね。それで「勉強せんでもいいや。」という雰囲気があって、それでなんとかせにゃいけんと思っていました。私が教頭の二年目の時に、中高一貫教育の名古屋大学の付属中等教育学校が主催する、中高一貫教育の全国研究大会があって、その時に私が横浜国大の付属高校に行ったのかな？

その所でいろいろ発表を聞いていたら、神奈川で中高一貫教育をやっている学校で、中高一貫教育なんだけど何人かの枠を確保しているだけのところがあって、その話を聞いて「あれ？ 吉賀高校も全部中高一貫にする必要ないんじゃないか。」と思って、戻ってきて齋藤校長先生に「中高一貫を五〇%ぐらいにしたらどうですか？」っていう話をしました。翌年齋藤先生が中高一貫教育を五〇%にするということを、中高一貫教育の中学の校長先生方にも了解をとって実際にされたんです、それは私が出たあとですけど。あれが大きな転機です。やっぱり齋藤先生が思い切って中高一貫教育を五〇%の枠にされたというのがすごく大きかったと思います。

## 6 先生方の高校魅力化への参加

——先生方はどうでしょうか？ 聞き書きなんかですとコーデイナー

ターの方が頑張っておられました。

熊谷…やっぱり最初は教員がよく指導していました。

——教員もなさっていました？

熊谷…「聞き書き」については、それはただ、ICレコーダー買って録音して、それを文字にただ起こすだけ。でも聞き書き甲子園って実際そうなんです。標準語に直すんじゃないくて、聞いたレベルをそのまま文字にするというか、「わしゃー、やれんかったいのー。」というのを、「わしゃー、やれんかったいのー。」って出すやり方だったんです。最初はみんなどうやるかわからず、とにかくコーデイナーが言うように子どもら連れて行ってとにかく聞いて帰ってくるみたいな形をやったんです。

それで次に分岐点があるんです。一つ分岐点は「聞き書き」をやるのはいいけど聞いて書くだけだったら知識が付くだけです。「へえー。」で終わってしまう。だからある先生が、「子どもらはそれでどんな力が付くんや？」っていう話をしました。「聞き書き」が二年目になる時に、彼が一年生の担任になるので「聞き書きを変えさせてくれ。」というのを言ってきたんです。結局要は抽象化する作業とか、まとめるというような作業がないと子どもの力が付かないじゃないですか？ それでその時に作ったのが吉賀町のマップです。大きなマップを作ったんですけど、それが、私が行った二年目の時です。

ただ聞いて書くだけじゃ子どもの力が付かないから、もうちょっとまとめるような作業をして、地図に落とし込むことをやりました。そ



れはもう「聞き書き」と言ったら失礼だから、『古高版聞き書き』っていうことにしよう。」っていうような感じでやりました。これ一つのは分岐点です。

そこから「聞き書き」が変わっていくわけです。もう一つ大きいのが「聞き書き」の次のステップのアントレプレナーです。「結局聞き書きしてどうするんですか？」という話になって、「じゃあ、二年目どうする？」って話になった時に、「同じことしても仕方がない。」ということで、私が浜高の進路時代に広島大学に一週間缶詰になって聞かされた話の中とか、進路指導の全国大会で、アントレプレナーで小学生が枯れ葉を集めて肥料にして会社作って、それで売っているっていう話が面白いなと思っていました。だけど到底教員だけじゃできないと思うっていたんですけど、それで次のステップ、吉賀町にこないものがあるってわかったんだったら、そのいいものを使って商売しようと考えました。商品開発とかそういうことをしたらどうだっていう話で、ちょうどその時に女性Gさんが来てくれたんです。アントレプレナー教育ということで、『アントレプレナーシップ教育』っていう言葉自体もちょっと取り組みの名前としては非常に不自然なだけ。要はUターンしてくるのに、結局「先生仕事がないけん、帰られんわ。」っていうのが多いのに対して、「じゃあ、仕事自分で作ればいいじゃない。」って言うためにはやっぱりアントレプレナーっていう言葉自体も知ったほうがいいじゃないですか？それが啓発になり得るなど思っていたので、だからアントレプレナーっていう言葉を敢えて残して、かといって起業だけではちょっと聞き書きの要素がなくなるので、アントレプレナーシップと、起業家精神を学ぶんじゃないかって、「起業家精神に学ぶ」としたのはそこなんです。

ただ本当に起業だけじゃなくて、いろんな所で無から有を生み出すような精神まで持ってくれたらなど、そういうふうに考えたのがそこです。ですから「ただ起業しましょう。」じゃなくて、そこで接遇の研修も入れて、女性Gさんが非常に活躍してくれました。それから男性Iさんっていうアジサイを作っておられる方がいて、私が教頭の二年目になる時、もう女性Gさんとすぐに二人でその男性Iさんのビニールハウスを訪ねていって、「学校でこんなことを考えているんで、ぜひ脱サラして起業したんやっという話を生徒にしてください。」ってお願いしました。

それから島根県内のある町で古本屋をやられていた男性がいますよね？ その方にも最初に来てもらいました。それがスタートだったかな？ 「聞き書き」一年目でやっていいもの知るんだから、二年目は『アントレプレナーシップ教育』でそれを使って何かをすることで、生徒の能动性・主体性を引き出そうと。そうすると子どもたちが「吉賀町ってこないい所があるんですよ。」「じゃあそれを使ってまた商品開発とか、観光開発だとかそんなことをしよう。」「っていうことになる。二年にビジネスコンテストに出したんです。

——ビジコンですね？

熊谷：はい。それで、女性Fさんのクラスの子どもらを二組は私が見て、一組は女性Fさんが見ました。女性Fさんが指導したほうは、都市部の付属の市立小学校受験があるじゃないですか？ そのお受験のためには体験が重要だと、それを吉賀でやって、それを旅行会社と一緒にやって誘致してというようなビジネスアイデアを考えました。私は男性B

さんの娘さんとチームだったので、米がいいので米をなんとか売ろうと、そうすると結婚式の時に大体やるじゃないですか？

——生まれた時ですか？

熊谷：そう、生まれた時の体重分の米を用意して、それだったら引き出物みたいな感じで配ったりもできるから、いいんじゃないかというアイデアを出したんだけど、私のほうは落ちて、女性Fさんのほうはトップ一〇〇に入って表彰もされたのかな？ それが授業とは別にやったんだけど、でもアントレプレナーシップの最初のスタートとしては面白いですよ？ 「こんなふうにやるんだ。」という感じで、それ結構インパクト大きかったと思います。

——それが二〇一三年度ということになりますか？

熊谷：なります、二〇一三年にそれをやりました。で、『アントレプレナーシップ教育』というのはいくつかをやっていくんだというのはいくつか知ってもらったかなって思います。そうするとそれは町にとってもいいじゃないですか？ リアルタイムでもいいけど、将来子どもたちがこういうことを吉賀でできるかもしれないと言って帰る気持ちになるという点でも動機付けにはしなないかなという所です。

## 7 高校魅力化と高校教育目標

——それでは校長先生が赴任した当時すでにあつた、吉賀高校の教育

目標と、高校魅力化の目標、例えば推薦入試に力を入れようとか、それから従来型の学力とは違う学力を付けることでリターンを促進させるというふうな話でしたけど、従来型の学力と高校魅力化の学力の関係はどのようでしたか。

熊谷…男性Cさんの娘さんが広大に通ったんです。

——広大に、推薦で？

熊谷…いえ、一般で。それは教員皆で応援したんだけど、それがあつてすごく感謝されているんです。吉賀高校の進路指導に対して、男性Cさんはそれが実はスタートなんだけど、その時はまさに従来型です。偏差値のみ、だから一般入試で合格しているので教員皆で添削したみたいな形なんです。そのあとはもう推薦やAOに挑戦するべきだということ、かつては本当に何年かに一人国公立大つてというのが、段々合格していきます。それはアピールしていました。齋藤校長先生の前の太田校長先生の時からそれは増えて来ていたのですが、でもその推薦というのは合格させるための推薦だった。

——出口指導の？

熊谷…出口指導です。ところがやっぱりそうじゃなくて志望理由書というの、将来像とかもつといういろいろ明確に考えていこうという方向にどんどん転換していったというか、こうしましょうというよりも、もう魅力化としてそうする流れがありました。特に「転換するぞ。」と

いうふうに転換した記憶はないけど、段々検討会とかやれば「こういうふうにやらせよう。」となつていった。だから校長の最後の年は医学部の挑戦もありました。ある生徒の時はみんなから無理じゃないかってあつたけど、本人やりたいんだつたらやればいいんじゃないっていう感じでやりました。すべてが成功した訳ではないですけど。

## 8 目指す高校像

——先生が考えていた高校生像、どんな高校生像だったんですか？あるいはどんな将来のキャリアを想定されていましたでしょうか？

熊谷…吉賀高校ですか？

やっぱり将来吉賀町に戻つて何かしたいっていう意思を育てるっていうのは一つの責任だとは思っていました。それは今でも津和野でも全然変わらないので、ただそのためには自分の出身地吉賀町に対してその良さを知る、そして誇りを持つって重要だと考えていました。

その良さっていうのは例えばお米が美味いとか、それも重要なんだけど、それ以上に吉賀町の人と出会うということが重要だと思っていました。そうすると誇りを持つってどうなのかって言った時に、誇りを持つための仕掛けとして、やっぱり吉賀町について自分の言葉で語る、子ども自身が語るって重要です。だからアントレにしても聞き書きにしてもそうだけど発表というのすごく重要で、そしてそれをキャリア教育デーみたいな形で町の人の前でも語る。

でもそれって誇りを持っていないと語れないかもしれないけど、語ることによって誇りを持つことはあり得るだろうっていう所はありま





すよね？ そういう所は吉賀高校の生徒像として、これは吉賀高校OBである中学校の先生と話していると非常に良くわかるんだけど、彼は自分の高校時代荒れていたとマイナスの言葉が出る感覚がすごく良くわかるわけです。ところが吉賀高校が私の時に志願倍率が夢の一倍を超えたことがあったんです。一・二倍っていうのが出た時に一番喜んでくれたのはその先生なんです。自分の高校に誇りを持つってどういうことかなっていうのは、その先生と話しているとすごく良くわかります。やっぱりいい学校でないだとダメだし、けどいい学校だから誇りを持てるんじゃないかって、自分たちが積極的に関わっていくっていうか、いい学校にしておくこといい学校になるっていうのが大切なのではないかと思えます。

けど子どもたちに「いい学校にしよう。」なんていう責任はいつでも負わせたことなく、学校生活の中で自分がやりたいこととか、やったことをちゃんと自信持って発表できるようにしていったら、結局それが誇りにつながっていくだろうなっていう所はずっと思っていました。特に島根県の西部の中山間地の子どもらっていうのは、そもそもいい子は外に出て行くって感覚でいるから、そう考えたら吉賀に残るってことはそれだけで自信を無くすような要因だとすると、もともと子どもらが自信を持つてくれるような、「自信を持って。」って言うんじゃないかって、自然に自信を持つような仕掛けを作っていく重要さをずっと考えていました。

そうするとメディアに出ることも大きかったです。やっぱり発表の所なんか新聞に出たりしてすごく大きかったと思います。一番は吉賀高校の生徒であることに誇りを持って欲しい、自信を持って欲しいです。県外募集っていうのはその意味があるだろうと思っていて、あれ



は強調しました。ほらほら、こんなに県外から来てくれるんだよ、地元の人もそんなにすごいものがあるって思ってたんで、小さい町で何もなくて言ってるけど、よそからこれだけ来てくれるんですよ、こんなに来てくれるってことはいい所だと思って来てくれてるんですよってという言い方によって、それを刺激に捉えて地元の子が自信を持ってくれるようになった。結構意識しているんな所で語ったりはしていたかな、地域の人にも語りました。

それでもう一つは吉賀高校の生徒であるっていうことに対して自信、誇りを持ってもらうためにポロシャツ作っただけです。街中見ていろんな人がポロシャツ着ていたら、「俺吉賀です。」って言うんじゃないですか？ 役場の人だつて吉賀高校の卒業生だつて言いにくい世界じゃ絶対にいけないわけで、そうするとああいうものを、もうほんと安く、実費だけで購入してもらって浸透させていって、どこ行つても「あれ、そのポロシャツどうしたんですか？」みたいな話になって、視覚的にも浸透していく、そうしたらいろんな所で「吉い高」（聞き手注：吉い高はTシャツの文字）なんていうのを見たら子どもらは自信持つじゃないですか。「あ、みんな着てくれてるんだ。」っていう。これは絶対効果あるなと思って津和野でもやっています。

——そうなんですか？

熊谷…そうです。津和野ではウィンドブレーカーも作っています。そういう意味では一応意識と行動とは一貫しているつもりなんですけど。子どもが自信を持つ、誇り持つことは、吉賀高校出てもちろんとこういう仕事就いてキャリアがしっかりするっていうのは非常に重

要だということと、それから実は資質、能力については埋もれていると思うんです。自信がないから「もういいや、もうだめです。」とかつてそういう感じになる子どもが多いので、だから開拓・開発をしなくちゃいけないと思うんです。それつてやっぱり先ほどの誇りを持つってことにつながっていくんだらうけど、現状として結局自信がないから積極的にチャレンジしないから、気付きもしない。なんとなく「もういいや、これでいいです。」みたいな感じで卒業していくような感じにならないようにするために、結局そういうアントレだとかをやるっていうことです。何か育てるといっこの子はこんな能力があるというのがわかっていてすることじゃない、そうじゃなくてこの子どもという能力があるのか、もう全然わからない状態というスタートで、そういうことをしていかないといけないんじゃないかなというふうに思います。

——いわゆるカリマネとかの関係があるんですけど、どんなふうにされましたでしょうか？

熊谷…これは難しいですけど吉賀ではあまりカリキュラムマネジメントまでできていなかったかなという感じはあります。だから内容的に「じゃあ一貫してこういうことをやりましょう。」はなかったと思うんですけど、ただ、吉賀の時代から「社会に開かれた」というのは保護者さんにもPTAとかで話していたと思うんです。それは、かといって英、数、国全部開くってなかなか難しいから、「アントレなんかでやっているというのは社会に開かれていますよね？」っていう言い方をしていて、それから「主体的、対話的で深い学びにつながる、対話

のスキルって結構こういうアントレとかで付けられるんじゃないんですか？」というところで、それはPTA総会なんかで言っていました。「こんなことを目指しています。」と、学力観も三要素は、これは吉賀でも言っていました。吉賀ではとにかく男性BさんがPTA会長の時から、私が教頭の時からだけど、「学校のこと良くわからんからPTA総会で話してくれ。」って言われてずっと私が話していたので、そこではそういう学力観、学力の三要素のことも言うし、社会に開かないといけないですよっていうことも言ってきました。そして校長になってから主体的、対話的で深い学びの重要さと、対話のスキルは授業だけではなかなか難しいけど、『アントレ』とかでいろんな人と話すことによつて磨くことができるというのは言えていたと思うんです。ただ、内容的にカリキュラムマネジメントとしてはあまりできていないかなっていう感じはしていました。

## 9 高校を取り巻くコミュニティの状況

——誇りを持たせる、自信を持つ仕掛けをする等の観点からして、人、財政、行政、あるいはコミュニティの状況は当時どうだったんでしょうか？

熊谷…私は協力者がいたことで、つまり応援隊があったことでそんな苦労していないので、だけど前任の齋藤校長先生とかはちょっと苦労されたかなという所はあります。

——応援隊と学校と行政というの、どついうふうに調整するかって

いうのは、初期の頃は苦労されたということでしょうか。

熊谷…そうですね。齋藤先生が苦労されたんです。だから私全然苦労してないんです。私が校長で戻った時には寮ができることになっていました。それからその年に塾も作らにゃいけんという話になっていたので結局苦労されたのは齋藤先生なんです。

だけどその元をたどっていったら結局寮や塾というのは、応援隊の人たちが振興会の総会とかで町長さんにガツ言つて戦ってくれたからできたような面もあるので、だからそういう意味では私がいない二年間って多分一番苦労されたと思うんです。私が行ったらもうできることになっていたので「ありがとうございます。」という世界でした。

最後、町長さんも引退される直前だったけど、関西だったか関東だったか吉賀会というのがあって、吉高だけじゃなくて吉賀会なんですけど、参加した時に町長さんが、「県が吉賀高校潰す言うたらなあ、わたしは町営にしても、町立にしてもやっついこうちゅうくらい気持ちは持つとるんじゃない。」と言つて、怒られているのか、励まされているのか全くわからない感じだったけど、町長さんもそこまで言ってくださったので、すごく感動したのを覚えています。確かに取り組みを推進するという点では最初なかなか動かかなかつたけど、結果的には寮もできて塾もできてこちらの望んでいることが完成されている。

ただそのイメージは、実は男性Cさんとかと私、教頭時代にすごく語っているんです。コーディネーターのSさんにも「NPO法人作つてさ、生徒らのアントレの内容をNPO法人が引き受けて、それを実際に事業にして儲けた金で塾運営できるといいですよね。」という話をしていました。男性Cさんらにも、「あとはもう県外募集することにな

れば、やっぱり寮と塾は必須だよな。」という話もして、シンポジウムでもそんな話が出ていたりして、それで応援隊の人らが「寮をなんとか作ろうや。」っていうふうに戦ってくださった。だから私は、けしかけといて大事な所いなくて、戻ってみたらできていたみたいな、そういう意味ではすごく楽をしました。

それからコミュニティという点では、「聞き書き」で公民館を中心にいろいろ手助けをしていただいて、少しずつ理解が進んで行ったところがすごくあります。男性Eさんっていう元同窓会長さんが公民館の館長で、そこ一緒にやったりとか。ただなかなか学校近辺の人は子どもがウロウロしたりするので、あんまり評判の良くない所があったかもしれないです。逆に見えすぎて。

——当時教育委員会はとうだったですか？

熊谷…教育委員会は……。

——今はもう教育委員会がすごい「やりましょつ。」という感じで、参加してくれています。

熊谷…そうですね、それはありがたいことです。

——去年はもう河原で教育委員会が中心になって中、高校、大学生が大サバイバルカレー作りアンド地元の若い人の人生を聞く会みたいなのをしました。

熊谷…それはすごいですね。私がない間が石井教育長さんで、私が教頭の時には石井さんが企画課長でした。部活帰宅バスは石井さんが作ってくれたんだけど、私と石井さんと一緒に話していて「よしやるう。」って石井さんが言ってくれて、部活帰宅バスになってからすごく生徒の利用頻度が上がっていると思うんです。石井さんが教育長になって積極的だったのかなとは思っていて、だからその時でしよう、寮も作るうという決断があったのは。

## 10 評価の視点

——それでは次お伺いします。生徒の学びをどのような方法で、基準で評価をされたのか？そしてそれは従来からの大学進学、出口の結果で評価するような高校教育の評価とどう違っていたのでしょうか？

熊谷…難しい所です、やっぱり評価というのはいつまで経っても。私は数字的に評価するというのは、なかなか魅力化についてはそぐわないだろうとは思っているんです。だから例えばもし数値で言うならば今の吉賀高校、いわゆる不登校みたいな子はいないわけでしょう？これは最高の評価になると思うんです。すごくいい状態だと思ってるんです。津和野高校でも現実はいまですけど、人数が増えれば当然絶対値は増えます。それでもやっぱり子どもが学校の中で楽しく過ごせている、やる気を持って過ごせていると不登校少ないですよ。それは結構重要な指標になるんだらうなと思ってます。それから県外からもそうやってきちっと目指してきてくれるというのは目に見える数字だらうなと思っています。

それから、津和野高校の例で言うと国立大の指標が合わなくなっているんです。関東から来てすぐ活動した子が有名私大を目指しているという、だから今年も残念ながら青学には受からなかったんですけど、立教、法政、立命大に合格しました。テレビで取り上げられた子が立命大、それから動画を作ったもう一人の子が立命大に行った。そういうような志向がすごく出てきていて、今までの国立大何人という指標では測れなくなってきたりいるかなど。それはそうですよね？例えば立命大に行った子なんて三年間うちで過ごしているけど、埼玉県の川口だから家から通える大学なんです。そのほうが安くつくっていう感覚だから、すごい理にかなっていますよね？ やりたいことを見つけて地元に戻って、SDGsなどもっと勉強したいって言うってすごくいい形だと思うので、従来の指標で考えるところならば、津和野高校は国立大の比率はむしろ減っているっていう所です。

ただ吉賀高校の場合にはまだまだ吉賀高校からでも国立大へ行けるよっていうのは地元へのアピールがあるので、これは重要なんだろうなと思います。ただしそこに、ただ数字だけではなくて、何を学びに行くかという中身が問われてくるだろうなという気はしました。今の吉賀町の動向としてやっぱり勉強して進学をバリバリ目指したいって言ったら都市部の高校に行くっていう、そういう子を取り込まなくちゃいけないってことになる、吉賀高校であれだけ楽しもうにやっついてちゃんと国立大に行けたよねっていうのは非常に大きな指標になるだろうと思います。今年も広大に行く彼女が、生徒会長までやった子が、彼女が行った……。

——Tさん。

熊谷…Tさん、そうそう、Tさんが行ったなんて、すごく重要な指標だろうな、しかも推薦AOで行った子かな？

——AOだったと思います。

熊谷…はい。すごく重要な指標、それが全国にというより地元に向かっですごく重要な指標であることは、これは間違いないです。しかし、単純に数字でというよりも、その一つ一つの意味が問われてくるのかなっていうふうには思っています。だから国立大何人行ったというよりも、こういうことを学んで、こういうやりたいことを見つけて、それでこういうことを学びたいと言って大学に行っただんですって話のほうがより意味を持つような感じになってきたかな。

——一点、聞いてもいいですか？ インタビュの前半で学校適応の話しを教えたいたんだんですけど、その吉高と津高それぞれ新しい魅力化が入る以前の状態が、位置付けが違うとは思ってますけど、それぞれで始まったことよって、学校適応にそれぞれ変化があったでしょううか？

熊谷…変化はあったと思います。そもそもそれまでは吉賀高校は、地元の子が入学してくるだけだったですから。津和野高校もそこは同じ条件だったと思います。それで、魅力化が始まった時に入学してきてやっぱり不適応を起した子がいたらしく、進路変更したと聞いています。



——それは県外生ということ？

熊谷…そうですね、県外生。吉賀も最初はそうでした。県外募集がスタートした時の、結局男の子が辞めたんです。

寮に移ってから、やっぱりちょっと適応できない県外から来た男の子が。それからその次の年も、県外から来た子が辞めて。そういう意味では魅力化が始まって質が変わってきているかな？ 魅力化が始まってから、生徒募集をするときには、「小さい学校で、和気あいあいとしていて、一人ひとり大事にしますよ。」って募集するわけです。そうすると、やっぱり「大きい学校で、ギクシャクしていて、どちらかというと埋もれている子」が、いろいろなことをリセットする気持ちで希望してくれる度合いが高いんです。しかし、そういう子は、中学時代にすでに不登校を経験している場合が多くて、高校入学後と同じような状態になることもあるわけです。

——町内生にとっても魅力化への転換というのはプラスに働いていまずでしょうか。

熊谷…それはめちゃめちゃ働いていると思います。私は、当初から県外生を受け入れると、中学時代に不登校などを経験した生徒が必ず一定数いることは受け止めなければいけないと言ってきたんですが、実際にはむしろ県外からはそういう子の方が多かったです。ところが、高校側も慣れてくると、そういう子への対応も次第にできるようになるんです。町役場でも高校支援係の人が丁寧に対応してくれたり、保健



師さんを派遣したりしてくれて。そうすると、現実には中学時代に不登校を経験した子も、学校を休まずに通えるようになるんです。そうなれば、学校としても落ち着きがあるということになりますよね。私もそれはPRに使っていたということもありますが、町内でもそれが評判になれば、地元の子どもたちにとっても「いい学校」ということになりやすいですね。

ただ、津和野の場合、県外から地域で活発に活動したいという子が入ってくるようになって、地元のおとなしい子がむしろあおりを受けて、不応を起こしているような面はあるかもしれませんが。

## 11 コンソーシアムとプロジェクト会

——コンソーシアムとプロジェクト会について聞きたいんですけど、コンソーシアムってというのが最近の言葉なので、当時は振興会ですかね？

熊谷…はい。

——は、どんな感じだったんでしょう？

熊谷…今がよくわからないですけど、当時は振興会は、これは非常に難しく町長さんが会長でやっている大きな組織については結局実態がないというか、総会だけやって応援団としては集まってもらったのは非常に意味があったけど、男性しくんだって役場の囑託職員じゃないですか？ 男性Eくんだったって教育委員会だし、だから実態がないん

です。それは、また振興会の会長が男性Kさん、同窓会長で町から振興会にお金が出るんだけど、なんか二本立て三本立てのような感じで、非常にわかりにくさがあったんです。

——プロジェクト会のほうがもうちょっと実態があったということですか？

熊谷…そうですね。プロジェクト会のほうが、吉賀町でやっぱり大きかったと思います。今でも毎月開いていると思うんですけど、

——なんか今月が100回目になると聞いています。

当時の校長先生の役割というのはどんな役割でしたでしょうか？ プロジェクト会とか振興会とか……。

熊谷…私は積極的に提案していくほうなので、あれやりましたよ、これやりましたよって。教頭時代もそうですけど、例えば中高一貫ロードレースなんて当時の体育の男性Nさんと一緒にやるんだけど、その時に「どうですか？」って言って多分提案したのは私だったと思います。校長になつてからも全体を見渡して必要なことを「やりましたよよ。」って言って、吉賀高校にも、吉賀町にも良くてというのを一番見える立場にいたんじゃないかな。その立場からこういうことができたらいよいよねって夢であっても語っていたと思います。もちろん、できていないことも山ほどあります。だけどそういう姿勢ではいた。そしてその提案ができるために、さっきの男性Bさんや、男性Cさんらともそうだけど、私自身が情報の結節点というか、外と内との結節点というイ

メージだった。渉外担当のような感じで。そうするとその中でやっぱり学校運営上は私自身が何らかの決裁をしなくちゃいけないんだけど、その時にも情報を持ちながら関係者と「こんなんでできるだろうか？」って話していました。中高一貫ロードレースも今、結構定着していますよね？

キャリア教育デーは大学の先生方においていただいた。それは齋藤先生の時もそうだったかもしれないですけど、中学生の発表も入れて、高校生だけじゃなくて、先生には高く評価していただいたりしたじゃないですか？ 吉賀中の生徒だけでも「どうだろうか？」って言うって、要は中高一貫やっている以上は中高一貫で何かやったっていうのを、体育的にはロードレース、文化的にはキャリア教育の発表会のように「こうなっていたらいいよね？」っていうのを。

私は、その時に急いで呼び掛けて全部（の連携校）でできないとダメだって発想持っていないので、できる所からまず一回実施することが重要だと思っているので、そういう突破口を開いていく。だからみんなにプレッシャーかけないように、吉中だけで十分だよな。」っていうレベルで発想して提案していったかなという感じですよ。だからその時に、根底にはこっちがこういうことをやっていたら役場が動かざるを得なくなるようなことを考えながら、小さい突破口を作っていくっていうスタンスでやってきました。

## 12 コーディネーターの役割

——あともう一つ聞いておきたかったのは、コーディネーター制度というのが先生の教頭時代からあって、段々定着していくわけ

ですけど、先生の時にはどんなふうな形で考えて、どんなふうに変化させていきましたでしょうか？

熊谷：吉賀時代は、女性Gさんが最初にコーディネーターじゃなくて進路支援の形で入ってくれたんです。その時は、私はもうコーディネーター的な役割をしてもらおうと思っていたので、平成二五年に。だから私は女性Gさんについてはバックアップは私がするので、方向性を話して、こんなことをやりたいって全体的な目標があるから、それを実現できるようにとにかくやってくれということで、具体的な計画なんかも任せてやってもらっていました。

それから吉賀が今どうなっているかわかんないですけど、私が出る時には、教頭と主幹教諭がいて、ベーシックな例えば教務の業務、それから総務の業務、進路指導の業務、そういう所の統括は教頭、それに対して生徒募集というような「魅力化」で新しく加わったものの統括は主幹教諭で、それは総務部長だっというふうに置いて出たんです。津和野でも今年度から改めて同じように、ベーシックな業務は教頭で、魅力化ということで生徒募集とか個別の対応なども主幹教諭がやっています。しかもうち三人いるコーディネーターの統括が主幹教諭だと。だからコーディネーターが「学校どうなつとるんだろうか？」「あれやりたいんだけど、これやりたいんだけどどう提案したらいいんだろうか？」といういろいろ悩んでいた所を、統括を主幹教諭にしたので、それまではコーディネーターが職員会議に出させてくださいという形だったのが、もう主幹教諭から全部情報が伝わるし、何か提案したい時には主幹教諭に「こんなことをやりたいんだけど。」って言って、主幹教諭が運営委員会とかに提案してくれるから、職員会議にでなくて

もよくなって、逆に自由度が高まった。だけど情報はちゃんと伝わるようになっているっていうふうにはなっていると思います。

——本日は、お忙しいところをありがとうございます。今後ともよろしく願っています。

